

2010 年北太平洋遡河性魚類委員会の動き

ながさわ とおる
永沢 亨（さけますセンター さけます研究部）

はじめに

北太平洋遡河性魚類委員会（NPAFC）は 1993 年に発効した「北太平洋における遡河性魚類の系群の保存のための条約」により設立され、カナダ、日本、韓国、ロシア及び米国の 5 カ国が加盟している。2010 年 11 月 1 日から 5 日にかけて韓国釜山広域市において第 18 回 NPAFC 年次会議が開催された。日本からは政府代表として水産庁資源管理部の福田安男指導監督室長および北海道大学岡本純一郎教授の 2 名が、他に専門家として私を含む 7 名が参加した。全体会議に加え、委員会からの付託を受け、公海域でのさけます類の漁業取り締まりを担当する取締小委員会（ENFO）、組織と財政問題を担当する財政運営小委員会（F&A）、科学情報の収集及び科学調査の立案を中心に活動する科学調査統計小委員会（CSRS）の計 3 つの小委員会が開催された。ここでは、筆者が参加した CSRS で議論された内容を概説する。

科学ドキュメントの検討

2010 年度に各締約国から CSRS に提出されたドキュメントは約 60 編であり、その中からトピックスと思われるもの各国数題ずつがスライドで紹介され会場で議論が行われた。各国とも興味を中心はやはり気候変動とさけます類の応答についてであった。2010 年漁期にフレーザー川水系のベニザケが予想外の高水準となったカナダからは、ジョージア海峡への降海時期の差異によって系群ごとの生残が異なることを強調した発表が印象的だった。ロシアからは大型トロール調査船を運航しての餌生物を含む生態系総合調査結果を精力的に発表していた。米国の発表では幼魚調査結果を利用してのカラフトマスの回帰予測モデルに環境パラメータを付加して改良している取組が興味深かった。日本からは今回で最後となるベーリング海での若竹丸流し網調査結果を中心としたドキュメントを紹介した。

残念ながら、調査船調査を取り巻く状況は厳しく、日本では漁獲枠の無い海域での調査や資源変動予測に直接貢献しない調査は実施が困難になりつつある。他の締約国においても、調査は自国の 200 海里内が中心で本来の NPAFC 条約水域である公海域における試験研究はやや停滞気味と感じられた。今後も日本系のサケが多く回遊する条約水



図 1. 年次会議本会議。



図 2. CSRS に参加した筆者ら日本側代表团。

域における調査を継続していくには、「各国系群の混交する条約における母川国の国際的責任を果たす」といった原則的理由や細かな科学的知見だけではなく、公海調査で得られた結果の波及効果と意義について広くアピールして行く必要性を感じている。

新たな科学計画（2011-15 年）

今回の年次会議での大きな進展は 2011 年から 2015 年にかけての新科学計画が採択されたことがあげられる。主題は「Forecast of Pacific Salmon Production in the Ocean Ecosystems under Changing Climate (気候変動下の海洋生態系におけるさけます類の生産予測)」ということで最終到達目標は太平洋さけます資源の年変動を予測するという内容になっており、日本側としても最も興味がある主題である。この計画には、1) さけます幼魚の回遊と生残、2) ベーリング海および隣接海域におけるさけます類の生産に与える気象変化の影響、

3) 北太平洋生態系におけるさけます類の冬期の生残過程, 4) 主要系群の生物学的モニタリング, 5) さけます類の管理のための系群識別手法の発展と応用 という5つの表題が含まれている。今後は各締約国がこの新科学計画の方向性を考慮して国別の調査計画を作製していくことが求められる。

国際ワークショップの開催

NPAFC の重要な任務の一つにさけます類の科学的知見の充実があげられるが、現在の太平洋さけます資源量が歴史的に高い水準であることを受け、2011年の10月30-31日にカナダBC州バンクーバー島ナナイモ市において “NPAFC International Workshop on Explanations for the High Abundance of Pink and Chum Salmon and Future Trends (サケとカラフトマスの高豊度要因と将来トレンドに関するワークショップ)” を開催することが決まった。これは1980年代以降全体として高水準であるさけます類でもサケとカラフトマスが増加後高水準を続けているのに比べ、ギンザケやマスノスケそしてサクラマスが低い水準のままであることに着目した主題となっている。すでにNPAFCのウェブサイト以案内が掲載されているので、興味のある方は是非参加を検討してい



図3. 釜山より車で1時間ほどのウルサン市 Taehwa 川で試験放流されたサケの回帰調査が行われていた。近い将来ふ化場が建設され、韓国最南端のサケ増殖河川をめざす。

ただきたい。 (<http://www.npafc.org>)。

発表要旨の締め切りは2011年5月31日である。また、2012年にはNPAFC創立20周年となるため、記念として科学出版物 “Life Histories of Pacific Salmon and Trout in the Ocean Ecosystems” がNPAFCとアメリカ水産学会の共同出版物として刊行される計画となった。この書籍は、1991年にUBC Pressより出版された “Pacific Salmon Life Histories” 後の海洋生活期における知見を総括することが期待されている。

むすびに

2010年8月には10年以上NPAFCの事務局員として活躍していたDenis McGrann-Pavlovicさんが、年次会議後の11月末に日本から派遣されて事務局次長を4年間務めた浦和茂彦さんがそれぞれ、事務局を去られた。違った場所での今後のお二人の活躍を祈念したい(12月1日付けで浦和さんはさけますセンターに復帰した)。なお、後任の事務局次長には米国のワシントン大学で公海調査を担当していた日本でもおなじみのNancy Davisさんが、事務局員にはClaudia Chanさんが着任した。新たな事務局メンバーの活躍とNPAFCの発展を期待している。



図4. 新旧NPAFC事務局次長。